

忘れない夏 ―嘉藤栄吉―

二〇〇三（平成十五）年、夏の全国高等学校野球選手権大会兵庫大会、開会式直後に行われた開幕戦、足あとのないきれいなマウンドに立っていたのは八十五才の嘉藤栄吉さんでした。真っ白なユニフォーム姿で、始球式に臨みました。大きくゆっくりとふりかぶり、ボールを投げこみました。

スタンドから大きな手がわき起こります。

今、マウンドに立っているのは「伝説の球児たち」の一人。

久しぶりにグラウンドの土をふんだ嘉藤さんも、きつと七十年前の、あの暑い夏の夕暮れの出来事を思い出していたにちがいありません。

一九三三（昭和八）年八月十九日。時刻は午後六時になろうとしていました。阪神甲子園球場では、第十九回全国中等学校優勝野球大会の準決勝が行われています。バックスクリーンの得点板は、つぎ板をしてかかげられた「0」が四十九個並んでいました。

先こうは兵庫県の明石中学校、後こうは愛知県の中京商業学校でした。午後一時に始まった試合は、もうすぐ五時間を経過しようとしていました。

まだそのころ、証明設備のなかった阪神甲子園球場は夕やみに包まれていました。グラウンドでプレーする選手から、観客席のたばこの明かりがホタルの光のように見えたといえます。

球場は異様な空気に包まれ、そして静まりかえっていました。

延長二十五回裏、中京商業のこうげきはノーアウト満塁。一点が入ればサヨナラという状況ようでした。明石中学校の中田投手は初回から投げ続け、すでにうでは感覚がなくなっているような状態でした。守備はバックホームに備えています。

九回裏にも同じようなピンチがありました。一死満塁、明石中学校応援席の人たちも負けを覚悟した場面、ピッチャーへのライナーでダブルプレーをとり、きゅう地をしのいでいます。延長戦、何度もチャンスをつぶしてきた明石中学校は二十五回裏の守りでエラーが重なり、このピンチを招いていました。セカンドの守備位置には、二年生ながらレギュラーにばってきされた嘉藤栄吉さんがいます。内野手は、中京商業三塁ランナーの前田選手をバックホームでアウトにするため前進守備です。嘉藤さんも二歩、三歩と前進しました。しかしどうしてか、ボールが自分のところに「こい！」という気持ちにはなれません。きんばくの状況きょうの中で、いつもの「さあ、こい！」という自信が嘉藤さんから消え失せていました。

打者の中京商業大野木選手が中田投手の四球目を打ちました。ボールは大きくバウンドをしなから、一、二塁間に転がってきます。

一塁手の横内先がゴロに反応しているのが見えました。

「これは……、一塁手のボールか……」というわずかなためらいが、嘉藤さんの動きをにぶらせました。

それは、明らかに二るい手が処理すべきボールでした、嘉藤さんはなんとかボールをグラブに収めました、中京商業の前田選手が三るいをスタートするタイミングを考えると、「間に合わないかもしれない……」という思いが脳裏をよぎりました。

嘉藤さんは、ボールをにぎり損ねたまま本るいへ返球しました。観客のかん声と悲鳴が一しゅん、静まりました。タイミングはアウトに見えました。しかし、主しんのコールは「セーフ」。手を広げるポーズに球場は再び大きなどよめきに包まれました。明石中学校の福島ほ手の足が、ほ球の時ホームベースからわずかにはなれたのは、嘉藤さんからの返球が高かったからでした。無情にも鳴りひびく試合終りよのサイレン。嘉藤さんはグラウンドにひざからくずれ落ちました。

試合が終わり、かたを落としてベンチに引き上げた嘉藤さんは、「すみませんでした。」

と、ナインに頭を下げました。自分のエラーで二十五回裏にサヨナラ負けをきってしまったのです。もちろん、だれも嘉藤さんを責める仲間はいません。しかし、嘉藤さんは自分で自分を強く責めていました。

「一生けん命やった結果やないか、仕方ない。だれも文句は言わん。」

高田かんとくは、そう言いました。

それでも嘉藤さんは、頭を上げることができませんでした。

「おまえはバカモノか！」

さらに、嘉藤さんの頭に竹山部長のど声がひびきました。

「これは、みんなで一生けん命やった結果だ。人間が一生けん命に全うしたことをだれが責めるんだ！」

自分を責め続けている嘉藤さんを一かつしたのです。そして言いました。

「頭を上げる！ 胸を張れ！」

延長二十五回という歴史に残る名試合でした。だれもが両チームの選手たちをたたえました。日本中でラジオを聞いていた人たちも感動していたのです。

しかし、嘉藤さんだけは、「どのツラをさげて明石に帰ればいいんだ……」と、自分の返球ミスの責任を背負ったままでいました。

嘉藤さんはぼうしを深々とかぶり、ナインとともに明石駅に降り立ちました。

ブラスバンド部の演奏が聞こえ、明石中学校の選手たちは、地元の人々の鳴りやまないはく手にむかえられました。敗れたといつても、その戦いぶりにみな感動していたのです。先ばいたちは、その出むかえに感激しなみだを流していました。

しかし、嘉藤さんの目にあふれたなみだは、一人ちがう味がしました。かん声とはく手のうずの中を、一度も頭を上げることなくうつむいて通り過ぎました。嘉藤さんは明石の自宅にもどり、閉じこもりました。

「自分のエラーであの大勝負を終わらせてしまった……。」

試合終りのようなしゅん間が何度も胸中に再現され、そのたびに、あの時と同じようにひざがふるえました。

「あの時、自分のところにボールが飛んでこなければ……。」

「もう少ししるい寄りに飛んでいてくれれば……。」

「もう少ししるいベース寄りに守備位置をとっていれば……。」

そんなことばかり、家に閉じこもって三日間も考え続けていました。

四日目の朝、いつものようにため息をついた時、嘉藤さんの胸にある思いがうかびました。

「いや。あの最後のゴロがいちばん未熟な自分へ飛んできたのは、きつとぐう然ではない……。」

嘉藤さんはそう感じました。

「そうだ、こんなふうにしてにげてばかりではいけないということだ。もっと自分をみがけということだ。」

あの日の竹山部長の言葉が、また頭の上でひびきました。

「頭を上げろ！ 胸を張れ！」

嘉藤さんは立ち上がりました。自分にはまだ機会がある。もう一度仕切り直して努力すべきだ。

嘉藤さんは家を飛び出し、チームメイトが待つグラウンドに向かってかけ出しました。